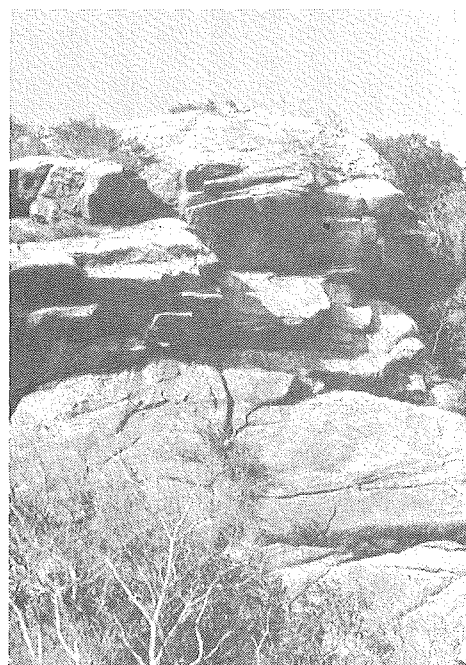


標高八九三・四、周囲約一〇で、東北を望めば筑前一帯を眼下に尽し、南を遠く望めば有明の海・阿蘇の噴煙を遙かに眺めることができる。

全山岩山が屏風のようにそびえたち、頂上よりも少し下方の西にあたって洞窟があり、その奥行約三・五、夏季に至るまで氷柱が垂れていることもあるといわれ、奇岩千丈の絶壁は人の肌を寒くし、往古は脊振山に籠った修験者の心魂を鍛練する道場にされたと伝えられている。

陽春には、全山に石楠花や躑躅の花が咲き盛り、秋ともなれば、



獵師ヶ岩（機山の山・隆信ヶ岩）の頂上

獵師ヶ岩は、三瀬景勝の一つに数えられている鬼ヶ鼻岩の西北峰にあり、東は唐人舞岳（腹巻山）、西北は井手野山・栗原山に拠って村の東北面に屏列し、頂上はみな佐賀・福岡の県境をなしている。

一 獵師ヶ岩の秘話

第一節 口碑・伝説

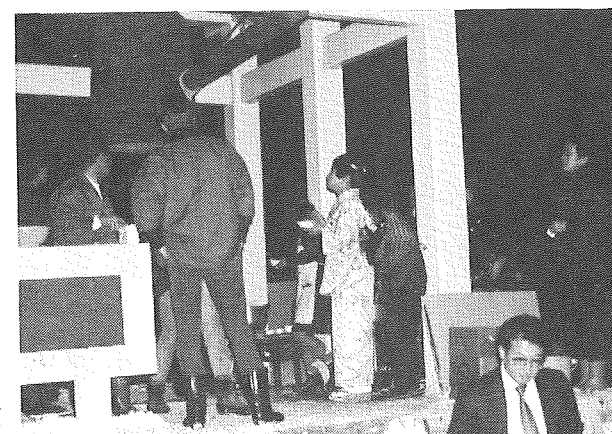
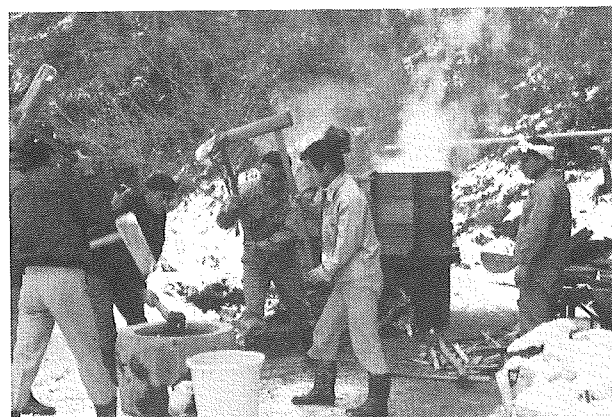
第六章 口碑・伝説・昔話

木々の紅葉が全山に色映えて、昔は雄鹿の妻恋う声も風に和したといわれている。

この岩山一帯には次のような伝説が残されている。

獵師ヶ岩山は、もと「機山」と呼ばれていた。その頃、都からやって来た隆信沙門という道心堅固な僧が、修行のために脊振山に入り、坊所を建てて隆信寺と名付け、そこにこもって念仏三昧の日々を送っていたが、里人の間に不審な噂がたっているのを知った。それは「機山の頂に白気が立つと何かの凶変が必ずおこる。この間その白気が立ち登ったので、いまに飢饉か疫病か天変地異などのわざわいがおこるにちがいない。」という里人の心配する声であった。

隆信沙門は、これには何か深いわけがあるにちがいない。真実を



きつ餅の月夜
みも餅の月夜
正除夜の会（延覚寺梵鐘）

どをつくって、日常米食のたしに用意するならわしがあった。

〔年越しそば〕 大晦日の夜を年越しとも言います。家族全員が夕食の膳について年越しをする。年越しそばまたは運そばといってそばを食べる習慣がある。トシの神がすぐそばにやって来たからお迎えの心構えをする意であろうか、このそばを食べておくと運がよいといわれている。このあと除夜の鐘がなるまで一家団欒でテレビを見たり、クイヤー箸（栗の木の細枝で作った箸）をけずったりする。この箸で食すると厨がよくなるとか、繰り合いがよくなるとかといって、正月にこの箸を用いる。

〔除夜の鐘〕 大晦日の夜、寺々で打ちならす梵鐘の音は、ラジオ・テレビで全国の名ある寺院をリレー放送するようになってから、耳に親しいものになった。百八つ撞くのは百八の煩惱の一つ一つを破るのだという。煩惱は衆生の心を悩まし、身を煩わして、得道をさまたげている惑いである。百八はその総数だというのが、除夜に鐘をつくという習俗は、インドや中国の寺院にはあったかどうか不明で、日本だけにある習俗ではないかといわれている。この鐘がなり終わると新年がやってくる。

みきわめて里人の不安をなくしてやらなければならないと思い、機山の山の南麓に草庵を結んでそこに移り住み、頂上の岩山に発見した洞窟にかよいながら座禪読経を続け、悪魔退散、国土隆盛、衆生皆樂、無病息災を念じた。それ以後、機山の山を隆信ヶ嶽とよぶようになった。

沙門はこの修行中、山頂に大きな石碑を発見した。碑面の苔を払って洗い清めてみると、正面に「東居宮」の三文字があり、その下に靈龜二年（七一六）とするされ、側面には「皇四十四代元正天皇靈龜二年五月 從勅命一品舍人親王建之」と刻まれていた。東居宮というのは瓊々杵尊のことである。

舍人親王は養老四年（七二〇）に「日本紀」三十卷・系図一卷を撰上した人々のなかの一人で、同年知太政官事に任ぜられた方である。

隆信沙門は、歴史にぐわしい舍人親王が瓊々杵尊の碑をこの地に建てられたのは、天孫御降臨のとき、もろもろの神々がここに集まって神謀りをされたからではあるまいかと推量しながら洞窟に入り、しばし目をして遠い神世の昔をしのんだ。すると不思議や、天孫瓊々杵尊の降臨されるときにの状況が、夢ともみえず現とも思えず、幻となって目のあたりに見えてきた。それは、諸々の神々が、神集いに集い、神計りに謀って、荒ぶる神々をことごとく海外に狩り出す手筈をきめられる重大会議の場面であった。

会議が進んでいるとき、神々の中から美女の姿をした一人の妖魔

誘惑したため、沙門はついに邪念をおこし、修行は不成就に終ってしまったという。

隆信ヶ嶽と呼ばれるようになった機山の山は、その後、長暦年間（一〇三七）になって、さらに龍神ヶ嶽と呼ばれるようになった。その由来は「脊振山記」に詳しいが、ここに略述すれば、

「印度国南天竺、德善大王の第十五王子が生まれて七日目に行方不明になられた。大王夫妻は悲嘆にくれておられたが、釈尊十八代の祖師、龍樹菩薩のそなえた天通眼によって、王子は扶桑国（日本）の西部、肥前国脊振山に垂迹（神として仮に現われること）しておられることがわかった。大王は非常に喜ばれ、自らも、ともに衆生を教化しようと考えられ、御后ならびに十四人の兄王子たちを同伴して、龍樹の神通力をそなえた龍神と龍馬に乗り、剎那の間に肥前国の脊振山に垂迹された。このとき、大王と御后が神の姿で現われたのが、乙宮山の護法善神と上宮の弁才天である。また、この山の東西に陰陽二つの岩があるが、東方の岩は護法善神の乗り給った龍馬が石に化したものであり、西方の岩は龍神が岩山に化したものである。云々……」

というのである。こうした伝説が一般化して、隆信ヶ嶽を龍神ヶ嶽とかきかえられるようになった。

ところが、こうした伝説も時代が移るにつれて忘れられ、のちに「獵師ヶ岩」と呼ばれるようになった。狩獵を生業とする獵師たちが龍神ヶ嶽の洞窟を利用するようになったからである。

があらわれて「吾は天地の未だ開けぬ昔からこの土地に住んでいる。」吾はこの地を絶対に動かない。」と叫んだ。そこで再び神計りに謀られたところ、他国のことよりも我が国のことが大事であるにはちがいないが、神のみそなわす天が下の蒼生（国民）はみな人の子、自国異国の隔てがあつてはなるまい。このような妖魔の出る国には必ず禍いがおこるであろう。妖魔は異国に追放するよりも、この地に埋めて、長く世に出ないようにすることが望ましい。という結論に達して、妖魔はこの筑紫の山の岩窟に埋められることになった。

美女の妖魔はいまわのきわに「この神国も瀧季の世（道徳人情のすたれた世、末世）となれば、親は子を殺し、子は親を殺し、臣は君を弑するような乱世となるであろう。そのときは、吾はまた美人と化して世に仇をなしてやる……」と声高く叫びながら埋められていった。

隆信沙門はこのときハッとわれにかえり、

さては、いまのは夢であつたのか。それにしても、あまりにもはつきり見えたのは、神仏の何かの啓示ではなかつたろうか。神世の昔から悪魔は降伏されてきたが、瀧季の世となれば悪魔が美人の姿をして出現し、世に仇をなすという。これは容易ならぬことであると、さまざまに考えながら、急いで草庵にもどったが、その夜は大熱を発して床についた。

このことがあつてから、隆信は万部経文読誦の修行にはいったが、九千部の経文読誦中に美人が現われ、様々の媚態をこらして沙門を

脊振連峰一帯には、昔は猪や鹿が多く棲息していた。これらの動物が峰渡りをするときの「けものみち」が、この洞窟の前を通っていた。獵師たちは、この洞窟の中に待機し、けものみちを通って来る猪や鹿を射獲つたのである。

しかし、後にこの獵師ヶ岩の洞窟では、不吉なことが多く、寒中にミミズ・蝦蟇（ひきがえる）・大蛇が現われたり、魔神が出たりするといので、ここで狩獵をするものはなくなったと言われている。

獵師ヶ岩の南麓入口の路傍に石祠が祭られ、神像が安置されているが、祭神の名は、隆信—龍神—獵神と時代とともに変遷してきた。

現在は神像の頭部がなくなつたままになっている。この像はしばしば行方不明になつたが何時のまにか戻つてきて、もとの座に安置されていたという。何者かが祈願のために借りてゆき、満願成就の後には返却したか、あるいは、盗んではみたが不吉なことがおこるので、恐れをなして、もとの座に戻したかの何れかであろうと言われている。

現在、獵師ヶ岩の南麓入口を「りゅうがみぐち」と言い、隆信沙門の住した草庵のあつた地を寺谷と呼んでいる。草庵はのちに梅溪庵と号し、中鶴の梅谷山円光寺の旧庵であつた。戦国時代の勇将神代勝利が新次郎とよばれていた頃、北山々内で武術師範をするためにこの梅溪庵に寄寓していたこともある。

獵師ヶ岩山にかかわる伝説は、後で述べる獵師山本軍助の話がある。その外、嵯峨夜桜化猫伝には、鍋島家に仇をなした化け猫が、

この機(ひ)の山(獵師ヶ岩のものと名)で育つたとされて、美女と化した妖魔の伝説を素材にとり入れた物語になっており、また、龍神や隆信寺の文字が、戦国時代に北肥の山野で雌雄を争った両将、龍造寺隆信・神代勝利の姓名に配されているのも、偶然のこととは言え、不思議な縁につながっているように思われてならない。

二 落人の恋

—三瀬山中の悲劇—

この物語は、西江 靖氏の著になる『火の国物語』の一節を拝借して、なるべく原文に近く転載したものである。(一)内は新に挿入した注釈。

旅人の往来も稀な(現在、国道二六三号線の舗装道路)三瀬峠は、神埼郡の北端福岡県に境する所である。その峻(たけ)しい坂にからぬ前、県道(現在、国道)の右に当って(今原)、物凄(ものごど)いばかりの杉の木立と、魔(ま)の住むような水の碧(あお)い塘(たに)とは、注意深い旅人には直ぐに眼につく筈である。尚深く探して行けばその薄暗い木陰に一基の石碑が、文字も分らぬまでに磨滅して、半ば土に埋れているのを見るであらう。

その石碑こそ、この物語の主人公の眠っているところである。

ころは寿永の昔、栄華と傲奢(ごうしゃ)を極めた平氏も、屋島の一戦に無風流な義経に追い立てられて、馬の蹄(ひづり)の立て場を失い、此所を先途と戦った壇の浦に脆(もろ)くも破れて散り散りに逃れ去った群(ぐん)の一人、某(な)を逸す」という公達は、人目を避けてこの三瀬山内に漂泊の子となつたのである。

栄華の夢果敢なくも破れて、驕奢(ごうしゃ)と權威とを失つた若い公達(こうだ)の身には、苦しい現実の圧迫が次第次第に近づいて来るのであつた。昨日まで玉簾(たまれん)深きところ、蘭麝(らんしゃ)の香ゆかし、花に酔い月に浮かれて、滑らかな膚と柔らかな黒髪より外には、何等の接触をも知らなかつた身が、今は逐(お)われて、刺激も色彩もないこの山中に入ったのであるから、堪(た)えられない寂寥(じくりょう)と苦痛とがひしひしと迫つて来たのは云う迄もあるまい。彼は如何にもしてこの無聊(むりょう)を消そうとした。

時には慣れない徒歩で山路を辿り、樵夫(しやうふ)住む部落に行くこともあつた。時には若葉のかげに啼(な)く時鳥(ときどり)の声を聞きながら、都の華やかな生活を思い出して、冷めたい袖を絞(しぼ)ることもあつた。それでも未だ流転(りゅうてん)の世相を感じて、真如(しんじゆ)の月を眺むるほど解脱(げだつ)する訳には行かなかつたのである。

彼は旺盛な欲求を満足せしめんために、恰(さ)も小鳥(せうてう)を狙(ねら)う若鷹(わかつたか)のように部落の女に眼を注ぐのであつた。

けれども、都の美女に憧(あこが)れた眼には、何れも強建(つよたて)すぎて却(かへ)つて醜(みにく)に見えるものである。とても綾羅(あやどろ)の袖長き都人とはくらべものにはならない。しかしながら飢えた者には眼はないのが常である。やが

て眼についたのは樵夫(しやうふ)の娘、この辺の山中には珍しくも色白の愛くるしい女であつた。それで彼は機会ある毎にその女を口説(くせ)いた。

彼の美貌と滑らかな都の言葉には、世を知らぬ初心な乙女心は直ぐに動いた。行末を思うほどの理知は、この娘にはなかつたのである。

今でこそ、尾羽打(おはだ)枯(か)らしてはいるが、かつては練絹(れんきん)を身にまとい粉黛(お化粧)あざやかに玉の階(き)を踏んだ公達。顔なら姿なら、その男振の麗(うつく)しさは、深山に笑める姫百合(ひめゆかり)の世知らぬ心を時めかすに充分であつたに違いない。ましてや深山路(みやまじ)の夏も浅(あ)う、卯の花垣根(うのはがき)に仄(ほ)匂(にお)う夕月夜。その悪(あく)からず思う人から、蜜にも似た愛の言葉をささやかれては、ただもう胸の血潮が波立つばかり、羞(は)じらう色は頬(ほ)にのぼつて、うなだれたその姿の如何ばかり艶(えん)であつたかは云うまでもあるまい。

こうして彼女は、處女(むすめ)十八の誇りを捨てたのである。

ところが、この近所に一人の若い樵夫(しやうふ)があつた。日頃から思いをこの娘に寄せていたが、臆(おそ)して恥(は)じて打ち明くる機会もなく独り片思いに胸を焦すばかりであつた。

娘の方でもうすうすはその気振りを知らぬでもなかつたが、いまはもうその男の心を汲(く)む裕(ゆ)はなかつた。草深い山家育ちの男と、都の水に磨き上げた優男とを較べては、娘の心はどうしても公達の方

に傾くのであつた。そうして夕べの椽(えき)に、寝覚めの床に、都の芳烈な色彩享樂(きやうらく)の話を聞かされては、武運目出度く再び平氏の世ともならば、玉の輿(こ)に乗

りてとの儚(はかな)い虚栄(きよぎ)に憧(あこが)れたに違いない。

哀れなのは若い樵夫である。何時までこうしていても仕方がないので、人を介して、やる瀬ない自分の悶える心を訴えたのである。しかしながら、その真心は柳に風と、聞きいれられぬのであつた。たびたびの事として、男の憤りはどんなであつたらう。

失意の男はもう一刻もじつとしては居られなくなつた。如何にもしてあの公達を殺さねば、女の心を我が物に占むることはできないと、深く決心して謀(はかり)らんでいた。逝く雲、散る花、それもみな男の心には怨恨(ごんい)の種となつたのである。

ある夕、宵闇に紛(まぎ)れ、黒い覆面の人の影は、拔足(はつそく)さし足、公達の家に窺(のぞ)き寄るのであつた。

毒蛇(どくへい)の牙のような願(ねが)ひ(いかり)のために、満身の血は宛然(えんぜん)火のよように燃えたつて、眠れる公達を起しもやらず、呑んだる刃(や)を抜くよと見るうち、闇にもしるき紫電一閃。急所の痛手に公達はアツとの叫びを現世の名残。あわれ玉の緒は絶え果てて、後には腥風(せいきう)、月影細く、虫の声のみ啾々(しゅうしやう)と聞こえていた。

娘の驚嘆はどんなであつたらう。君が一夜の情には、百年の寿命も惜しからじと、睦(むく)び合(あ)いしも槿花(ぎんか)の夢。傷(や)ましくも冷え果てた公達の骸(が)に取(と)り憑(よ)つて、よよとばかりに泣き伏したが、反魂香(はんこんかう)(焼くと死者の魂を呼び返して煙の中にその姿を現わすという想像上の香)ならぬ現の魂(たま)が再び甦(よみが)えることはできない。

それからは夜となく昼となく悲嘆の涙にかきくれていたが、やが

て心に許せし亡き夫の後を追わんと、艶やかな緑の黒髪を振り乱して、狂気の如く塘の岸へ駈寄ったが、そのまま身を跳らしてザンブとばかり……。

その塘が前に云ったそれなので、直ぐ傍の石碑こそ、果敢なき恋路に最後の頁を彩った公達の亡骸を葬った所だ。今は年古りて訪う人もなく、春風秋雨幾百年。ただ更くる夜の燼辺のまどいに故老の物語のみ伝わっているのである。

三 山本軍助利恭の鳥獸供養塔

今原の杉神社一ノ鳥居前、国道二六三号線的路傍に、山本軍助利恭の鳥獸供養塔が建てられている。この塔の由来については、次のような物語りが伝えられている。

山本軍助利恭は永祿六癸亥年（一五六三）に三瀬の里に生まれた。成人して鉄砲の達人といわれるようになり、この人が目型の山から射った鉄砲の弾は、陣ノ内村の裏山にある樹木にとまっている鳥でも射落したと言ひ伝えられている。

軍助は幼少の頃から狩猟を好み、十八歳のとき獵神に祈願をこめて、猪千頭を射ち獲ることを祈誓した。

それ以後毎日、山を駆け谷を巡っては猪を撃ち、射獲った猪の頭数が増えて満願の日が近づくのを無上の楽しみとしていた。

軍助の家族は、年老いた母と妻の妙子、それに生まれては死に、また生まれては死んでしまい、ただ一人生育した男の子、の四人暮らしてあった。

母は歳とともに衰え、いまでは明日の命さえ案ぜられるほどの病床にあった。妻の妙子は、病床の母に対して嫁としての温かい孝養を尽すかたわら、わが子の養育に心をそそぎ、夫、軍助に対しては優しい妻として仕え、毎日狩猟に出かける夫の留守を守って、何の不平も言わずに今日までその務めを果たしてきた。

家では軍助が猪千頭射ちを立願して以来、なぜか不吉な出来事が多かった。

愛し子が、母に抱かれて眠っているときにも、また寢床に入ってすやすやと眠っているときにも、不意に激しい泣き声をあげて苦しみもぐることがあり、その有様はちようど弾にあたった猪の断末魔に似ていた。こうして生れた子はおさないうちに次々に亡くなり、現在の男の子がただ一人生育したのである。老母の気力も射ち獲る猪の数が増すごとに、弱っていく姿が目に見えてはつきりした。妻の妙子は口には出さないが、夫、軍助の殺生の因果が母子にまで報いられているように思われて、ただ、悲しみの涙にくれるばかりであった。

それにひきかえて、軍助は射ち獲る猪の数が増す毎に喜び、母の念仏の声も、妻のなげきの涙も、耳目にはとどかず、すべては、秋の山路に散り敷く落葉の上を走る猪の足音としか聞こえなかった。

こうして射ち獲った猪の数は積もり積もって、慶長十七年（一六一二）十一月十九日に九百九十九頭になった。

あと一頭で立願成就という日をまちかにむかえた軍助は、心もおどろ、その夜は狩仕度を十分にとのえて床に就いたが、夜のあけるのが待ち遠しくてならなかった。眠ろうとしても、若い時分から射ち獲った猪の大小や、そのときの苦労・喜びなどが、次から次へと脳裏をかすめて眠られなかったが、いつしかうとうとするうちに一番鶏が鳴いて暁を告げていた。

初瀬の里に忍びよって晩秋の風に、木々の紅葉も散り初めて、北肥の国境に高く聳びゆる獵師ヶ岩嶽も、その峰に続く金山も、雪雲におおわれて、頂にはかすかに白いものをつけていた。

軍助は今日が満願の日になるか、はたまた明日に延びるか、心はずませながら夜も明けきらぬうちに寢床をはなれ、鉄砲を肩にして忽々と家を出た。

勇ましく出てゆく軍助の姿を、病床にあつて眺めていた母の目には涙が一杯光って、大無量寿経普門品の念仏を唱える声がかすかに聞えていた。

軍助が家を出て、破れた板戸の口から何時になくふりかえって妻の姿を見ると、よる年波と憂世の風にやつれた顔は涙にぬれ、愛し吾子を抱いて見送る姿は、あたかも觀世音の再来のように、気高くも優しく美しく見えた。

その情景を見て、流石の達人軍助も何かしら一抹の暗い影が胸に

閃く思いがしたが、行ってくるぞと一声残して、我が家をあとにするのであった。

軍助が日頃猪を多く獲ったところは、隆信ヶ岩（獵師ヶ岩）を中心にして北嶺の尾根を越えた深い谷間の要処であった。

今日も第一の目的地は隆信ヶ岩の洞穴。天正九年十八歳のとき立願して以来三十余年、いよいよ今日こそ最後の一頭、満願成就の吉凶の分れ目と、まだ明けやらぬ晩秋の冷気を身にいつぱいに浴びながら、山神山の曲った坂道を一刻も早く越そうと、一步一步を力強くふみしめて登っていく軍助であった。

山神の峠を登りつめたとき、今日に限って何となく息苦しく覚えた。いままで長い歲月の間にこの坂道を幾百度となく越えてきて、一度も疲れを感じたことがなかったのにどうしたことだろう。われながらとる歳には勝てぬかと、五十路の老いの身をなげきながら、峠の小溜りに一休みしていた。

晩秋の天気は変わりやすい。霰交りの冷雨が降りだし、かすかな音をたてて峠道をぬらしはじめた。道にはねかえる霰を軍助が見つけていると、どうしたことであろう、この寒気に一匹のミミズがい出してきたのである。不思議なこともあるものだと思っで見ていると、今度は一匹の大蝦蟇（蛙）がノソリノソリと現われて、はっ見つめていると、今度は五尺以上もある蛇がスルスルと出てきて、たったいまミミズを喰ったばかりの大蝦蟇を巻きしめて呑みにかか

った。軍助は眼前の出来事のあまりの不思議さに気を取られて、しばらくぼう然と見つめていた。すると山騒とともに冷雨を交じえた一陣の山嵐が、落葉をまきあげて吹きまわったかと思うと、一頭の大猪が、鼻息も荒々しく尾を巻きたてて突進し、蝦蟇を呑んだ大蛇に襲いかかって、噛み切りながら喰いはじめた。

猪を見てわれにかえった軍助は「よくも大猪が現われたり。これこそ天のわれに与え給えるなり、あな嬉しや満願の千頭目。天の神地の神・日頃信ずる猪の神が、吾に恵みし獲物なり。今日は遠くの目的地まで行かぬうち、現われ出たこそ幸いなり」と、高鳴る胸をおししずめ、かねて用意の種ヶ島に強薬をつめこんで、一撃のもととねらいをつけた。まさに一発、引金をひこうと指をかけたとき、おお恐ろしや、いまだ大猪と見えた獲物が白髪のお仙と変り、齒を喰いしばって口からたらたらと血を流し、大口を開いたかと思うと、血のように真赤な一つ目を光らせて、軍助をじろりと睨み返した。

目一つ坊神の形相のもの凄さに、軍助は身も竦み気も転動して、ねらいをつけた鉄砲を投げ捨て、無我夢中になって、今登ってきた坂道を目散に駆け下って我が家にとどりつき、顔面蒼白。力も抜け、茫然として上り檻に腰を落とした。

この有様を見た妻の妙子は、静かに軍助の前に進み出て両手をつかえ、涙をまぶたにたたえながら、たつたいま半時ばかり前に母が此の世を去ったことを告げた。そうして、いまわのきわに母が言い

遣した山本家の素姓と軍助の無益な殺生を悲しむ前世からの不幸なめぐりあわせについて、母の言葉をそのままに軍助に伝えた。

それは次のような遺言であった。

「軍助は十八歳に成長すると、雨の日も風の日も一日とて休むことなく猪討ちのみに精進して、村人から猪討ちの名人、狩人達者よとほめたたえられると、そのたびごとに慢心し、日を重ね年の過ぎゆくにつれて散化する猪の数をふやし、今日で何頭、明日また幾つ獲れるかと、喜び楽しんで殺生を続けてきた。そのことは言わず語らずとも、この母はよくその実情を知りぬいておりました。何と悲しい山本家の因縁であろうか、逆因縁の恐ろしき、この悲しい運命の糸に引かれて軍助の母となり、親子として日暮らしする悲しさは、たとえようもないものでした。

山本家の素姓を言えば、かたじけなくも大職冠藤原鎌足公より十六代の孫、藤原実行朝臣の流れを汲む禁裡守護北面の武士、山本上総守殿、寿永の昔、四歳にならせ給う未だ幼い安德帝を守護し奉り、平氏の公達ともろともに、須磨や明石あるいは屋島の戦いに、雌雄を決しての戦闘も遂に武運つたなく、追われて西海壇ノ浦の決戦に破れ、上総守殿はこの草深い北嶺の谷間に身を隠されたのです。その後世を重ねてわが夫軍左衛門利定殿は子に恵まれず、由緒正しい山本家の血統が絶えようとするのを悲しみ、この母と二人で、初瀬の里に鎮座します薬師如来と、あわせて猪子大明神に立願し、如来と大王の功德によって、私共夫婦に山本家を承け継ぐ男子をお恵

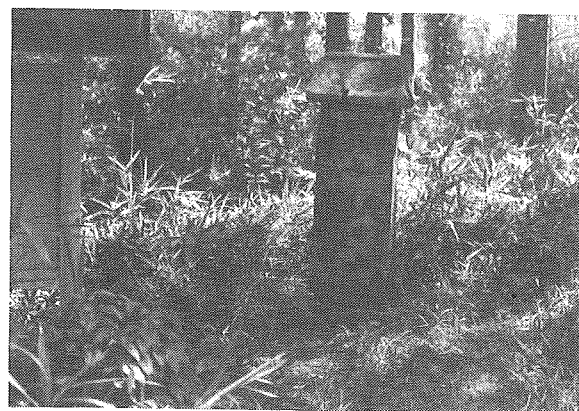
み下さるよう三・七・二十一日の祈願をこめました。そのかいあつ

てか月満ちて無事に生まれたのが軍助で、夫利定殿の喜びはこの上なく、生まれた年も生まれた月日も亥の年の亥の日、名も軍助利恭とつけて、その成長を待つうちに、父利定殿は死出の旅におもむかれました。父なきあと玉よ宝よと育ててきた甲斐もなく、前世からの約束事とは言え、立願の神・恵みの神である猪子大王の化身である猪を、十八歳のその年から、千頭討ちの立願まで志し、しばしの仮の世に、殺生をもって無上の楽しみとする業につくとは、何と不幸なことであつたか、この母にとつてはあまりにも悲しい運命の浮世でありました。軍助の日頃獲る猪の命が、一頭づつ消えてその数が重なるたびに、母の命もこの世から遠ざかってゆくような思いでした。

今日の千頭目は、わが生みの子育ての子軍助が、この母の体を矢玉にかけるも同然。猪の千頭討ちは不成就なれど、母が猪の身代わりとなって、この世から永却に消えてゆくことにしましょう。そして御仏のいます浄土から父利定殿とともに、軍助と妻子が幸長くこの世を過ごすよう、また、山本家御先祖様に対しても恥じないで日送りができるように祈りましょう。お先に逝つて御仏様とともにお待ちします。

と言ひ遺して、夜の明け方、静かにお亡くなりになりました。」と妻は涙とともに母の臨終の有様を語った。

軍助は、わが家の素姓と自分の生い立ちの由来を初めて知り、さては、今朝の千頭討ち不成就の不吉な猪の化神は、わが子を思い、



山本軍助の鳥獣供養塔

命にかえて殺生をやめさせようとする母の一念が神仏に通じた救いの化神であつたのかと、母の尊い母性愛に感動するとともに、わが身の無明を嘆きながら母の死を悲しみ悼んだ。

軍助は長い間殺生を楽しんだ迷いの夢もさめ果てて、とりあえず、親子三人連れ立って、父母の



山本軍助利恭
慶長十七壬子年十一月
今原神社前・鳥獣供養塔

立願した生みの仏、育ての神である薬師如来と猪子大明神にお詫びのために参詣し、以後殺生をやめることを誓った。

そのあと、長谷山観音禅寺に大禅師をたずねて、今朝方の出来事と母の遺言を物語り、禅師の計らいによって、いまだ無益の殺生をした鳥獣の供養を営み、鳥・鹿・猪を刻した供養塔を立てて鳥獣

の冥福を祈った。慶長十七年壬子十一月廿日、山本軍助利恭五十歳のときであった。

四 洞鳴の滝情死悲話

この話は今から約三百年前の実話である。洞鳴の滝というのは、岸高から井手野へ向う県道を、東へ五百里程行ったところにあり、今は民家のかげになっているが、むかしは民家もない溪谷で、道路もずっと高いところを通っていて、現在のような川添いの県道はなかった。滝の落差もいまよりずっと大きく、峡谷の奇岩怪石の間を、白滝のように落ちる水は、岩に砕けて数丈の滝となり、洞岩に轟く水の音は、あたかも竜が洞穴で叫び鳴くかのように聞こえたので、村人はこの滝を「洞鳴の滝」と呼んだ。滝の落ち込む淵はその底の深さも知れず、千古の色をそのままに、碧藍神秘の深淵として知られ、いまでも三瀬景勝の一つとされている。

延宝九年辛酉（天和元年一六八一）正月二十一日。その日山内は夕方から大吹雪となり、土師村妙見社の大樟の木に吹きつける雪風は、ごうごうとすさまじい音をたてていたが、夜半になると風はすっかり止んで、雪だけが津々と降り続いていた。

夜が明けてみると近年にない大雪で、あたり一面白皚々の銀世界と化し、裏山の孟宗竹も重々しく雪をかぶって弓のように曲り、枝

葉を大地に垂れて、大雪のなかに埋もれそうになっていた。

ここは、神崎奥山内の氏長者ともいわれる藤原村大庄屋 音成六兵衛重任の館である。主人の六兵衛重任は、昨夜の大嵐で寝つかれなかったせいか、明け方になってぐっすり寝こんでしまい、正午近くに目をさまして床をはなれた。館の縁側に出て、野山も谷も一面の準平原と化した大雪に見とれていると、八龍宮の下手の道を、幾つかの黒い人影が館の方へ小走りに近づいてくるのが見えた。その人影は館の門の外までくると、口々におろおろした声で「お館さま。一大事でございます。お知らせにまいりました。」と呼びつづけた。

六兵衛重任は、もしかしたらと思いあたる子細もあったが、ゆつくりと玄関まで出むかえ、「何事でございますかのかのう皆の衆。この大雪に村うちで何か異なこともござったのか。」と尋ねた。

先に進み出た名主の平兵衛が、涙を拭きながら、「お館さま、お気の毒なことながら、丁度正午に近いころ、雪も一先ず止んだというので、村の甚助どんが洞鳴の淵にエノハ釣りに出かけたところ、淵の下手の飛石のところに、若い男女の水死体が流れ着いているのを見たといつて、あわてふためきながら知らせに帰って来ましたゆえ、私をはじめ皆の者が出向いて検めてみますと、お館の御曹子善忠さまとお仙女ではございませんか。一同びつくりして大急ぎお知らせにまいったようなわけでございます。」と、報告した。

六兵衛重任の曹子善忠は当年十九歳、眉秀でて一目ぼれするほど

の美少年であった。

一方のお仙は、同じ藤原山の内、岸高村の庶民の娘で、芳紀まさに十八歳、みめうるわしく、容貌は芙蓉を羞しめ、姿態は楊柳を凌ぎ、風に紊る柳のような、ふんわりと垂れる黒髪、雨に悩める海棠のようなしおらしきで、まさに匂いこぼるるばかり。田舎には稀な美女で、村人からは北山小町と呼ばれていた。

二人の間には、思春の年頃をむかえるとともにいつしか恋の心が芽生え、行き逢うたびに慕情はつり、互いに人知れず思いを焦がす身となって、悩ましくやるせない日々を送るようになった。

延宝八年弥生の中頃、岸高五丁の田原には黄金の色した菜種の花が咲き匂い、空には長閑に雲雀がさえずって、人の心も浮きたつような暖かい春の一日であった。

善忠は心のままに、従者も連れずただ一人で土師の館を出て、洞鳴の淵に来て釣糸を垂れながら、時のたつのも忘れていた。

お仙はその日、朝から桜の谷に早蕨狩りに出かけていたが、その帰りみち、丁度洞鳴の淵のほとりを通りかかった。

無心に釣糸を見つめていた善忠が、通り過ぎようとする姉冠りの乙女を、何げなく振りむくと、夢にも忘れたことのないお仙が、ほのかに赤らめた顔に、花も恥じらう美しさを漂わせながら、足をとめて軽く会釈するのであった。

目は口ほどにものを云うとか。呼ばれるともなく近寄って腰をおろしたお仙。

二人は、釣糸を眺めながら、初めて言葉をかわしたが、秘めたる愛のささやきは、恥ずかしきにとぎれがちであった。こうして、此の日、初めて蜜のように甘いひとときを過ごしたのである。

それからというものは一日逢わねば千秋の思いがして、叶わぬ恋と知りながら、しのぶ恋路の逢坂山（今の太佐古）、しのび逢う日を重ねるうちに、二人の胸には永遠に断ち切れぬ思慕の心と温い血潮が通いあつて、もはや身分の上下はなく、行末を考えるゆとりもなく、父母のゆるしも待たないで、百歳も千歳も変らぬ契りを結ぶ仲間となつてしまった。

しかし、当時の武家は、身分の違うものとの恋愛や結婚を厳しく禁じていた。武家の御曹子善忠と庶民の娘お仙は、いかに思いを焦がして恋し合おうとも、動かぬ階級の垣根は越せず、六兵衛重任のゆるしが無い限り、所詮この世では叶わぬ恋とあきらめるより外はない悲しい運命にあったのである。

鳴瀬川の流れば淀んで、長閑な春が来たというのに、あわれ道しるべなき恋の山路に踏み迷った二人。谷を蔽う花の色も目にはつかず、松に奏ぶる楽の音も耳には入らず、ただ、恋する人の声だけが玲瓏として胸の小琴の絃を揺すぶり、姿だけが夢枕にも失せやらぬ幻となつて眼にうつるのであった。

移ろい易い春は過ぎて、青葉の陰には、鳴いて血を吐くという時鳥の訪れる夏となったが、深い悩みを胸に秘めて、鳴かぬ蜩の身を焦がす二人であった。

とかくするうち夏も暮れ、物かな鳴の羽風に秋は立つた。月見ては千々に心を砕き、虫を聞いては涙に袖を絞るうち、雁も鳴いて白露の繁き晩秋となった。秋は物こそ悲しけれと言うが、もの思う身にはまた一入。人の道も名誉も家柄も、すべてを捨ててこの恋を遂げようと心に定めた二人ではあったが、救いを求めて神よ仏よ許させたまえと、心のうちに祈ることも幾度かくりかえしたのである。やがてその年も暮れ、延宝九年の新しい年を迎えたが、こうした二人の仲が村人の口の端にのぼらぬはずはなく、噂はしだいに広まって、知らぬ仏は親だけではないかと言われるようになった。心配した伯父の古川五兵衛重治と広瀬六太夫ならびに伯母の妙世の三人は、今のうちに早く何とかとりなしてやらねば世間に対して顔向けしないと、互いに相談し合って新年のあいさつがたがた土師の館を訪れた。

父の六兵衛重任に会った三人は、善忠とお仙が恋し合う仲になっていることを話し、このままにしておいては世間体もよくないので、お仙を一先ず武家の養女にした上で、一日も早く二人を夫婦にするように切願した。

しかし、六兵衛重任は伯父伯母たちの勧めには耳をもかさず、烈火のように怒って善忠をその場に呼びつけ、

「何としたことぞ、この親不孝者奴が。身分家柄を考えてもみよ。

吾が家は遠く昔原道真公より代を重ね、宗祖音成遠江守殿がこの土師村に館を構えられ、肥前の国守からは奥山内の氏長者を許され、

現世において佐賀、神埼三山内にて氏長者と申すは、神埼口山内の長者廣滝瀬兵衛往貞殿、佐賀口山内の長者佐保十兵衛家永殿、他の一家は神埼奥山内の吾が音成氏であるぞ。余人もあろうに、庶民の娘と恋仲に陥るとは言語同断。不義はお家の法度。七生までの勘当だ。」と、刀を引きよせ、いまにも切り捨てんばかりの勢いに、伯父伯母ともどもにどうすることもできず、ただ涙を絞って善忠を慰めるばかりであった。

善忠は、たやすく許してもらえとは思っていなかったが、あまりにも激しい父の怒りに弁解する余地もなく、いまは望みの綱もまったく切れ、この世での恋をあきらめるよりほかはなかった。

善忠は深い決意を胸に秘め、それからの幾日かを悶々として館にひきこもっていたが、正月二十一日夜の嵐を幸いに、ひそかに館を抜け出し、愛しいお仙のもとへと急ぐのであった。

夜も更けてお仙の家に近寄った善忠は、きめていた合図でお仙を屋外に誘い、父の激しい怒りにふれたこと、この世で結ばれる一縷の望みも絶えたことなどを伝え、別れるよりも死を選びたいといういまの苦しい胸のうちを、涙とともに打ちあけた。聞いたお仙も心は同じ、別れて一人何で生きよう生きれよう。二人は浮世のおきての冷めたさに、身も世もあらず嘆き悲しんだが、いまはもう、親も恨まず世間をも憎まず。今生の恋をあきらめて、大慈大悲の御仏の在す安養浄土の世界で、二世三世までも夫婦になろうと誓い合ったのである。

て腸を断つばかりであった。

しかし、いまとなつては如何に嘆いても逝った二人が帰るものではない。せめて死後にもと、二人の恋を許し、比翼枕に亡骸をならべて、死出の香華を枕辺に、奥山願正寺常楽山延覚寺住僧を導師として、読経の声もおごそかに葬送の儀式をすませるのであった。

そうして、二人の遺体は、音成家累代の墓地に比翼塚を築いて、しめやかに葬ったのである。今も昔の面影をそのままに、相寄り相慕うように立てられた墓碑の下に、二人は安らかに永遠の眠りにについている。山中観音禅寺に納められていた位牌には、

同帰 孝岳善忠信士
洞岩妙仙信女
延宝九年辛酉正月廿二日
施主 音成六兵衛重任

とあったが、墓碑には天和元年西三月廿二日と刻まれている。

注 位牌に同帰とあるのは同時に死んだことを意味し、また、年号



音 天和元年と改元されて、
観 いるからで、
仙 同じ辛酉年に
お 違いはない。

いまは風雪も止んで、たがいに固く抱き合って見上げ見下ろすお仙・善忠の凄艶な顔を、脚速に千切れる雲の間からのぞいた下弦の月が、淡くかすかに照らしていた。

今宵まで互いに相慕い相誓った想いの数々を秘めて、北嶺の谷間に咲いた愛の花は、五濁悪世から清浄歓喜の世界へと、蕾のままにいま散ろうとしている。憑むは尊い浄土での二世の契のみと、今生のはかない恋を悲しみながら、善忠とお仙は静々と思ひ出の洞鳴の滝へ向うのであった。

それから数刻のち、滝の上の洞岩に出て相抱いて立った二人は、南無阿弥陀仏の声もろともに、身をおどらせて千古碧藍の深淵に沈んでいった。延宝九年正月廿二日未明、うら若い愛の花は実のらずして散って逝ったのである。

二人の没した水面に円を描いた水泡はまもなく消えて、あとには、峰に吹きわたる雪風と、丈余の滝の轟く音が、最期に唱えた二人の念仏の声を秘めて峡谷にこだまし、諸行無常のひびきをいつまでもつたえていた。

さて、話はもとにもどって、里人のしらせをうけて、曹子善忠とお仙女の情死を知った六兵衛重任は、自分の意志があまりにも頑固一徹で、若いものの心情を理解し得なかったことを深く後悔するとともに、人生の無常をいまさらに感じ、胸がつぶれる思いがして、すぐになすべき術も忘れ、汀渚に寄せる泡とともに消え入るように力も抜けて打ちなげき、悲しみの声は干潟の夜の鶴のようにかすれ



善忠(右) お仙(左)の墓碑

また、洞鳴山にはお仙女の菩提のために、観世音を祀って冥福を祈つ

た。村人はこれを「お仙観音」と呼んでいる。

為洞岩妙仙女頓証菩提

延宝九^辛酉年三月二十三日

本願 音成六兵衛重任 同市左衛門

中野仁右エ門 芹田弥右エ門

廣瀬六太夫 廣瀬妙正

古川五兵衛重治 高島又右エ門

高島徳右エ門 中川宗右エ門

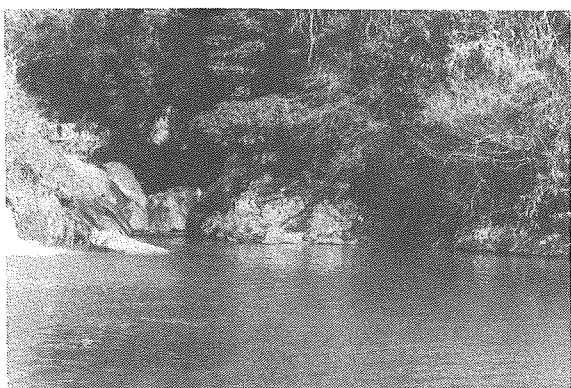
徳川織右エ門

土師村女人講中

七間谷女人講中

落屋敷女人講中

碑面には以上のように刻まれている。



洞 鳴 の 瀧 つ ぼ

ところが或る日のこと、誰の命によるのか、まだ明けきらぬ暗いうちから、コトン、コトンと大きな音を立てながら、一生懸命に大斧を振りかざし、天に聳びゆるこの大杉を切っている者があった。薄明りをすかしてよく見ると、何時からか初瀬の里に一人ぼっちで住む孫太郎という仙人のような

白髪の爺さんであった。

そこへ、同じ白髪の見知らぬ老人がひょっこり現われ、孫太郎爺さんに親しみ深く声をかけた。「おう、誰かと思うたら孫太郎どんかい。えらい早うから気張つとるのう。」

その声を聞いた孫太郎爺さんは切る手を休めて、

「どこのお方か知らんばつてー、この杉ばかりは了見にやこじい(合点がゆかずに)居りまっする。この二、三日ちゆうもんな(というものは)夜通しのごとして気張つて切いおるばつてー、夕るし(夕方)仕事はやめて家さい戻つて、翌朝また来て見ると、前の日に切った木のコケラ(木片)が元に戻つて塞がつてしもうて、あらためて新らしゆう切らんなんもんぢやー(切らねばならぬものだから)、何日切つたつちやー(切ったとて)同じことで、ほとほと困つとる次第ばつてー、辛抱が第一と思つて精は出しとるたんたー(たんだー敬語)。」

と、困っている事情をつぶさに物語った。

そのことがあつてから幾日か経つた或る夜のこと、孫太郎爺さんが昼間の疲れでぐっすり眠っていると、夢か現か、先日声をかけた白髪の老人が幻のように現われて、静かな口調で、

「孫太郎よ。おれはお前が杉を倒すのに苦労しているのを見るに見かねたので、よい方法を教えに来た。それはほかでもない。お前は毎日精を尽してあの大杉を切つてはいるが、大体お前の使っている斧がなつとらん。あの斧で千年かかつて切つてもあの大杉は倒れ

五 孫太郎観音

いまから幾百年前の出来事か、つまびらかではないが、三瀬山村今原の杉屋敷に、千古の歳月を経たという杉の太木が立っていた。

この杉に朝日の影がさすときは、北山陣ノ内村まで陰がのび、夕日の影が照るときは、長谷山観音禅寺近くまでその陰がといた。この杉の陰のために一帯の田畑は日照りの時間が短かく、作物のできにまで影響したが、この杉は古くから神木として村人に崇拝されてきたので、たやすく切り倒すわけにもいかなかった。

大きな地響きに驚いて集まった村人は、天に聳えて立っていた杉

の神木が倒れているのを見たが、不思議にも神木は民家を避けて倒れ、根本の切り口に入って斧を振るっていた孫太郎爺さんの姿は、何一つ残さず消えて、どこにも見付けることができなかった。

村人はこの不審なできごとを気味悪く思い、神木のあたりを恐れたが、誰言うことなく「孫太郎爺さんその人が実は神木の化身で、爺さんのやったことは神木自身がこの世の寿命を終るときにやるしさであつたに違いない。」というようになった。

村人はいままで崇め親しんできた杉の神木を失ったが、そのかわりに神木の化身、孫太郎を神として祠に祀った。人々はこれを孫太郎神あるいは孫太郎観音と呼んだ。

この事以来、斧を製するときは必ず血流しを入れ、山の仕事初めには火をたくようになったという。

その後幾星霜、今から凡そ二百六十余年前に提出された孫太郎神社の由緒には次のように記されている。

場所 三瀬村今原鎮座

敷地 一畝 御本帳免

祭神 孫太郎

享保四年己亥九月日 提出

佐嘉御本藩神社奉行殿

雇神主 吉村掃部家次

同嫡子齊旨章

これは、江戸時代天明の頃の物語である。

鳴瀬川は川幅が広く、水量も豊かであつたので、この堰も大きく築かれていたが、大雨が降るたびに決壊し、里人はその復旧のための公役^{くやく}に明け暮れる有様であつた。

とくに卒塔婆^{そとば}が立てられた年には、幾度も大雨洪水に見舞われ、そのたびにこの堰はおし流された。復旧しては流され、流されてはまた復旧へと、せき止めの作業は何回となく繰り返された。

そのために農民は疲れきっていたが、蔵入米の減収をおそれる藩の代官所からは、井堰決壊のときは即刻復旧せよという厳命が下されていたので、復旧工事の手をゆるめるわけにはゆかなかつた。

とくに村役や組頭たちは、上納米の徴収納入の責任をもたされていたので、一日も早く復旧して、干上がろうとする水田に水をおくって、稲作を豊かにしておく必要があつた。ところが打ち続く水害のために堰の決壊は大きく、人夫も疲れいていたので作業はなかなかはかどらなかつた。

その日も一同は河原に集まって円座を組み、せきとめてもせきとめても流されるこの堰を、何とかして堅固なものに仕上げる方法はないものかと、思案投げ首していたが、よい案も出てこず、干上がろうとする水田を眺めては天を仰ぎ、ただ神仏の加護を祈るより外はなかつた。

一同が困り果てて嘆息しているとき、いままで見かけたことのな



孫太郎観音堂

御番所役人豆田与佐衛門
基広

三瀬治部大夫大江房
成

嘉村八郎右衛門貞氏
嘉村政右衛門貞成

以上

六 卒塔婆の堰

獵師ヶ岩山・脊振山背口ノ山・井手野山・栗原山の連峰から発した水の一つにあつめて流れる鳴瀬川が、洞鳴の瀧を経て岸高南方の田原を通って神有部落に入ったところに、一帯の水田用水をひくために設けられた井堰がある。

もとは、この井堰を「卒塔婆の堰」と呼び、堰の南端には卒塔婆が立てられていた。

かかつた。見ればその僧は盲である。

作業の指図にあたっている村役の頭はその盲僧を見て、苦しい時の神頼みのようなのであるが、幸いにも通りかかつたあの僧に、せめて祈禱だけでも頼んで神仏の加護を祈ろうと考え、去って行く盲僧のそばに走りよつた。そうして、堰止め作業に困りはてている事情を話した上「ここを通りかかれたのは何かの縁、貴僧の法力によって、この堰止めに効験ある経文をお唱え下さって神仏の御力添えを祈っていただくわけには参りますまいか」と、ねんごろに頼みこんだ。

自信ありげにうなずいた盲僧は即座に承諾し、村役の案内で一同のいる河原におりてきた。堰に向つて立つた盲僧は、しばらく黙想したのち、念珠をつまぐりながら朗々たる声で経文を唱えた。

唱え終つておもむろに礼拝した盲僧は一同の方に向きなおし、「ただいま経文の功德^{くどく}によつて神のお告げがあつた。そのお告げによれば、この公役^{くやく}人夫のなかに、履物の緒が右縫りと左縫りになっているのを履いている人がいる。その人をこの堰の人柱として埋むれば、永久に流れない堰止めが成就すること間違いないとのことである。」と言つた。

これを聞いた人夫たちは、もしや自分の履物が、そのお告げに的中しているのではなからうかと驚き、村役はじめ恐る恐る自分の履物をしらべた。ところが人夫の中からはそれと名乗り出るものがないので、村役が一人一人の履物を点検してまわつた。しかし該当

するものはなかった。最後に盲僧の履物をあらためると、なんと、盲僧自身の履物の緒が右縫りと左縫りになっていたのである。

盲目の悲しさ、自分の履物がそれだとは気が付かず、村役に見てもらってはじめてそれを知った盲僧が哀れに見えたが、盲僧は少しもあわてず、神のお告げのとおり、拙僧を人柱にせよと言って、泰然自若、経文を高らかに唱えながら埋められていった。

それからは不思議に作業もはかどり、いままでない堅固な井堰ができたのである。

人々は井堰の完成をよろこび、これはまことに神仏の加護にちがいない。あの時の盲僧こそ実は神仏の化身であつたのであろう。ありがたいことだと、僧体を埋めた処に卒塔婆を立てて、盲僧の冥福と井堰の安泰を祈った。それ以来この堰を「卒塔婆の堰」といい、部落の名前も有難い神の留まり給う処ということで神留村と呼ぶようになった。神有村と言うようになったのは明治の御代になってからのことである。

この大堰ができあがつたおかげで、ひでりが続いても水量豊かに神留村の水田をうるおし、年々豊作を重ねたという。

七 聾^ななおし地蔵

佐賀県神埼郡北の最果て、三瀬峠の絶頂（標高五八三^三）、道路

の西側に大きな石の碑が建てられている。この碑は一柱の碑に見えるが、よく見ると、幅約四〇^三・高さ二^三余の角柱を二本密着させてある。

北側（右）の碑には

正面に、従是北筑前国

北面に、怡土郡飯場村抱

裏面に、文化十五年戊寅四月

南側（左）の碑には

正面に、従是南肥前国

南面に、神埼郡三瀬山村

裏面に、文化十五戊寅歳四月書

と彫刻されている。何れも能筆な彫りあとであるが、肥前国の方がやや肉太で力強く感じられる。年号のかき方もちがうので、おそらく別人の書であろう。

この峠を境として、佐賀・福岡を結ぶ国道二六三号線が曲折しながら南北に縦走している。国道指定を受けたのが昭和三十五年四月二十二日であつた。沿道の山々には小鳥が多いといふので、この国道をバードラインとも名付けられた。

舗装道路になってから日はまだ浅いが、この道路の歴史は古い。むかしは、杉や雑木が昼なお暗く生い茂った溪谷の底を縫う細道で、湧き出る水のために湿気の多い坂道であつた。それでも北肥前から筑前に通ずる街道ともいふべき要路で、肥前側では筑前路とい

い、筑前側では肥前路と呼んでいた。古記録にはこの辺の情景を「旅客難塗の景」と表現した文書も残されている。戦国時代にはノロシが揚がると飛脚が韋太天走りをしたところである。いまは溪谷を蛇行する舗装道路。佐賀・博多両駅間の最短路で、観光・産業の重要なルートとして、車両の交通量も急激に増加した。

「聾なおし地蔵さん」は、この峠にある国境碑の正面、国道をはさんで東側切割のやや高いかと思われる場所の、小笹のまじった灌木の茂みの陰にまつられている。

文政六年癸未（一八二三）六月十一日に建立されていて、施主はわからない。

この地蔵さんは、耳のよく聞こえる地蔵菩薩で、肥前・筑前両側の人々の話し声を大小残らず聞きとることができ、聾^なをなおす霊力を持つていたといわれ、耳の悪い人が祈願すると霊験あらたかであると信じられた。

参詣する人は、ここにそなえてある火吹竹を一本借りて帰り、お地蔵さんを念じながら家族のものにたのんで、聞こえない耳を、毎日くりかえし吹いてもらっていると、いつの間にか耳が聞こえるようになった。耳がなおると、あらためてお礼のために参詣し、そのときは新調の火吹竹をつけ加えて返納することになっていた。

むかしは沢山の火吹竹が供えられていたという。いまでは火吹竹を見かけないが、参詣する人はあとを絶たない。肥前よりも筑前の人々によく知られているようである。筆者がこの稿に掲載する写真



国 境 碑



聾 な お し 地 蔵

を撮りに行ったときも、福岡から来た五十年配の上品な婦人がお詣りしているのに出会った。聞けば、耳の悪い孫のために祈願しているとのことであつた。

この峠の近くには泉が湧き出ていて、むかし、旅人はそこに休んで咽^{のど}をうるおした。大正五、六年頃までは二、三軒、昭和の初期には一軒の茶屋が残っていて、峠を越す人や祈願のために参詣する人

々に、甘酒・砂糖餅・うどん・そば・おこし・餡がた・などを売っていた。峠についた人たちは、その茶屋や近くの草原に腰をおろして、肥筑の景色を眺めながら、世間話に花を咲かせた。

明治七年の佐賀の乱には、小倉鎮台の小笠原大尉の率いる官軍の一隊はこの道を進撃して来た。これに対し峠を死守しようとする江藤新平の副将六角大之進の指揮する北山軍勢との間に激しい戦闘が行なわれた。小笠原大尉は進軍に際して

三瀬山峯の松風あらくとも

やがて治まる御代や来るらん

と詠吟したといわれるが、その声はもとより、指揮する人の叱咤する声、戦う士卒の雄叫びの声など、前記旅人の世間話とともに、お地蔵さんの耳には余すところなく聞きとられたことであろう。

それから過ぎる幾十星霜。いまは車で峠を越す人々の声を聞き、香華をたむけて祈る信者の姿を、慈眼に笑みをたたえながら見守っ



六 地 蔵 (坐像)



大 江 道 寛 石 祠



六 地 蔵 (立像)

ている。

八 疣なおし地蔵

疣なおし地蔵は平松部落と池田部落にまつられている。

疣という語は飯粒(いひば)の転じたものといわれ、皮膚にできる丸い小突起物のことである。一種の皮膚病で、現今ではハトムギを煎じて飲んだり、薬をつけたりして、簡単になおすことができるが、治療薬の発見されていなかった昔は、一つできると次々に数がふえ、なかなか根治しにくい頑固な出来物であったので、痛みはないが気味の悪い厄介な皮膚病とされていた。

むかしの人は、疣にかぎらずなおりにくい病気にかかると、神仏への祈禱や呪い(まじない)をやればなると信じたので、地蔵尊や

薬師如来をまつて祈願する風習がひろく各地に普及した。

とくに地蔵はあの世とこの世との境にあって、冥途におもむく者を救うと説かれたので、ついには、地蔵に祈って現世の利益を求める風潮を生みだした。

とげぬき地蔵、夜なき地蔵、延命地蔵など、祈願の内容に応じた名前を持つ地蔵も多く、村内では山中の脚気地蔵、三瀬峠の聾なおし地蔵、池田・平松の疣なおし地蔵なども、その例である。なかでも、平松の疣なおし地蔵は、中央に石祠があり、その左右に二本の六地蔵が合祀されているところに特色がある。六地蔵は、六道(天上・人間・修羅・地獄・餓鬼・畜生道)のいずれにも現われて、人々の苦悩を救ってくれると説かれているので、平松の場合は、この世でかなえられないならあの世でも救われないという強い願いをかけたものであろう。左側の六地蔵は座像、右側のは立像が彫られている。中央の石祠の中には衣冠束帯をつけた座像が彫られ、古老の伝承によれば、大江道寛という人をまつてあるとのことであるが、疣なおしというだけでどのような人物であったかは不明であるが、来往するとき白馬に乗って来たと伝えられている。

大江氏といえば、三瀬氏や豆田氏の遠祖であるので、この大江氏もその一統であったかも知れない。

この場所は、むかし寺のあった跡といわれ、一帯には文化・文政年代まで園芸植物として玩賞されたカラタチバナが散見される。

石祠の中の像の姿や付近の状況から推察すれば、大江道寛という

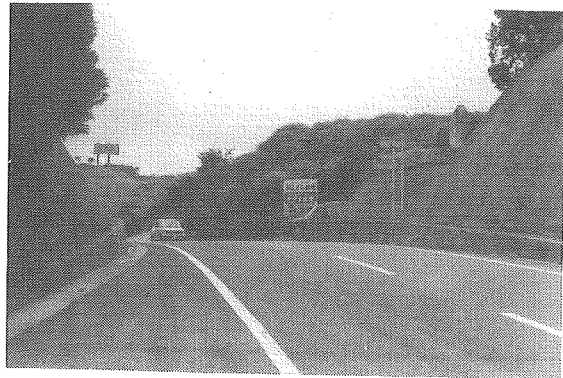


池田部落の疣地蔵

人物は、知徳のすぐれた神官寺僧(神仏混淆時代)で、疣なおしなど医術の心得もあり、村人から深く尊敬されていたのであろう。六地蔵を左右に安置したのは、霊験の強化を願ったものと思われる。

疣なおしを祈願するときには、年の数だけの小石を拾ってきて、それで疣をこすってからお供えして祈ることになっていたという。池田の疣なおし地蔵は、同部落中央辺から羅野川(現在高瀬川と呼ばれるが、明治初期まで羅野川と呼んでいた)を渡る細道の左向う川岸に建てられている。写真のような頭の尖った自然石に「南無地藏大菩薩高嶋平之允」と刻んだ石碑である。建立した年月は碑文の右肩に印されていたと思われるが、磨滅風化してはつきりしない。

地蔵建立の由来は不明であるが、橋のかかつていなかった時代には飛石伝いに川を渡ったとみえて、橋の下には今でも大きな飛石が顔を出している。少しの雨でも水をかぶって、渡るのに危険を伴っ



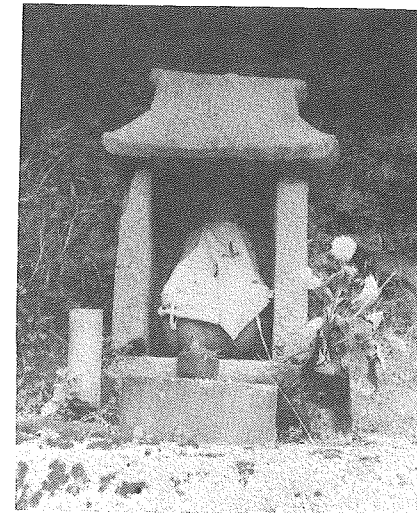
向合峠（左上に観音、右上国道記念碑並びに石碑）



比 丘 尼 谷

比丘尼の亡くなったあと、峠近くには幽霊が出るという噂がたち、不思議なことに峠を越す人々や牛馬の事故が頻発し、いつまでたっても災いがあとを絶たなかった。二百余年も絶った後々まで噂は消えず、事故が起こるた

定かではないが、峠にある三つの石碑は、討ち取った綾部氏主従を埋葬して立てた墓碑ではないかといわれている。綾部氏が討たれたあと、一人の女性が向合峠西山の麓に庵を結び、仏門に帰依して念仏三昧に入り、その菩提を弔ったといわれ、その屋敷跡も現存し、地名を比丘尼田と呼んでいる。



（西側）向合観音（扉は後方においてある）



（東側）石 碑

抗も空しく、滅多切りに討ち果たされてしまった。神代勢は間髪を入れず伊豫守の本拠鳥羽院城ならびに同じ一派と目された腹巻城を急襲したため、両城ともにひとたまりもなく陥落し、城内のものはほとんど戦死した。このとき、謀議のために鳥羽院に来ていたといわれる綾部氏は、血路を開いて逃げのびようとしたが、道を暗まして向合峠にさしかかったとき、神代勢の伏兵に発見されて討ち取られたという。

九 向合い観音

たであろうし、長雨や集中豪雨が降れば、飛石が流されるおそれもあったであろう。そこで、この地域の有力者高嶋平之允が、飛石の安泰と村人の安全を祈り、私財を投じてこの地藏碑を建立したとも考えられる。また、平之允の近親者に疣ができて困っている人がいたのかもしれない。

地藏は元来、あの世、この世の別なく人間の苦悩を救ってくれると信じられていたので、当時根治しにくかった疣の治癒を願って、この地藏を建てたとも考えられる。

とにかく、この地域の人々は今でもこの碑を疣地藏と呼んでいて、地藏碑の前には往時供えたと思われる小石がそのままに残されている。

向合い観音は、国道二六三号線の南の村はずれ、大和町との境の向合い峠にまつられている。この峠の道は、むかし、奥山内（三瀬村）から佐賀方面へ出入りする旅客の主要な往来とされ、北の出入口三瀬峠とともに旅客難塗と形容されていた。長雨・日照り・降雪の四季には旅客が難渋する道であったからである。旧道はいまの国道よりも高めのところを通っていたので、観世音は路面からあまり高くない位置の西側木陰に東を向いて座していたが、国道になると

き路面が切り下げられたため、いまでは路面よりもずっと高い切り割りの上にあり、参詣する人のために、梯子を立てかけたような細長いコンクリートの階段が設けられている。

道路の東側には、国道開通記念碑が建てられているが、その右上（南側）杉林の端の草むらの中に、古ぼけた三つの小さな石の碑が、西を向いて立っている。この石の碑と観世音が道路をはさんで向き合っているのが向合い観音と呼ばれ、この峠を向合い観音峠または向合い峠というようになったという。

この観世音の由来について、古老の伝承によれば、戦国時代に肥前国主龍造寺隆信と北山内の驍将神代勝利が、たがいに勢力を争ったとき、隆信は大軍を擁して神代勢と戦ったが、一勝一敗をくりかえすばかりで、なかなか雌雄を決することができなかった。そこで隆信は謀略を用いて、戦かわずに神代勝利を亡きものにしようと考え、三養基郡綾部城主（姓氏不明。以下綾部氏とかく）ならびに神代氏に従属している鳥羽院城主西川伊豫守の両氏と密約を結んで味方に付け、神代勝利殺害をくわだてた。

伊豫守は、ひそかに山内の同志を募ろうとしたが、そのことがかえって禍いし、謀判の企てが事前に露見してしまった。

それとも知らない伊豫守は、永禄五年（一五六三）九月九日、恒例の重陽節句参賀のため、何食わぬ顔をして三瀬城に登城した。参賀の式礼もすみ、祝宴がまさにはじまろうとするとき、ときを計らって満を持していた神代氏側近の武士たちに取り囲まれ、必死の抵抗

びに、これは死霊のたたりであろうと、人々におそれられた。観世音はこの迷った靈魂を鎮めて災いを除き、峠を越す人や牛馬の安全を守っていただくためにまつられたもので、道路東側の三つの石碑に向き合わせて西側路傍同高の位置に安置され、人々はこれを向合い観音と呼んだ。

観世音の石祠には、

安永九年庚子

十二月吉日

施主 杠山

横尾久左衛門

と刻まれている。元来、観世音は大慈大悲の徳をそなえ、世の人の求めに応じて、その苦悩を除き解脱を与えろといわれている。三瀬村内では古くから観世音信仰が一般に広く普及していたとみえて、ほとんどの部落内に観音堂が建てられ、木彫りに金箔をほどこした観音像が安置されているが、向合い観音は石祠の中に石の観音像が安置され、しかも村境に鎮座されているところを見ると、前記由来のとおり、道路の安全を守る道祖神や馬頭観世音のような役割をも果たすものとして信じられてきたようである。

一〇 伊保坂の水

三瀬村今原伝照寺裏にある旧道の坂を「伊保坂」という。この坂

ではない。これは名案だと一人でうなずき、近くの泉をさがして水を汲み、伊保坂までの往復にかかる時間まで勘定に入れて、休み休み帰っていった。

七兵衛の家に帰り着いた甚吉は、病床にある七兵衛に「伊保坂の水を汲んで来たよ」と言いながら、湯呑みに入れてさしだした。

これは、これは、遠いところをありがとと礼をいって、その水を一口飲んだ七兵衛は、大きなため息をついて、あーあ、おれはもうだめだ。伊保坂の水の味が峠の水の味としか思えなくなった。おれはもう、長い間楽しみにして飲んだこの伊保坂の水の味さえも、のみわけることができなくなってしまったわい。と嘆きながらぐったりと力を落し、病氣は一そうひどくなったという。

伊保坂の水は今でも湧き出て伝照寺境内、縁結び地藏尊のほとりへ流れ下っている。

一一 お茶でもござらぬリンジャーさん

藤原村柳瀬に藤原林左衛門という人がいた。この人はたいへん歯が強く、通称をリンジャーさんと呼ばれていた。

ある日のこと、伝照寺第十二代の住職得隣和尚がリンジャーさんの家の前を通りかかると、子供達が二銭ゴマ（獨樂）の鉄のケンが曲ったのを、石でたたいて真直になおそうとしていた。近くで見

る路傍に滾々と湧きでる泉がある。この水を飲めば息切れがしないというので、昔、この村を通る飛脚はよくこの水を飲んだ。また、傷ついた小鳥はこの水を浴びて傷をなおしたとも言われ、「伊保坂の水」といえば三瀬三銘水の一つとして知らないものはない。

幕末の頃、筑前の飯場に住む七兵衛という飛脚がいたが、七兵衛は往きも戻りも必ずこの水を飲むのを楽しみにしていた。そのためか、年をとっても人に負けない健脚の持主で、仲間の誰よりも多くの文便を運んでいた。ところが、ちょっとした風邪がもとで七兵衛は重い病氣になってしまい、長の病床につく身となった。

日が経つとともに病氣が重くなる七兵衛は、久しく飲めないでいる伊保坂の水が恋しくならなかった。何とかしてもう一度飲みたいと思って、隣家の甚吉という若い者に相談すると、甚吉は日頃世話になった重病人の願いをかなえてやろうと思い、足に自信はなかったが、その水を汲んで来てあげようと約束した。

甚吉は早速行ってくるよと家を出たが、平素長途を歩いたことがなかったので、三瀬峠まで来ると疲れてしまい、路傍の石に腰を下して休んでいた。考えてみると、これからこの坂道を三瀬の方へ下って伊保坂という処まで行き、水を汲んでまたこちらへ登って来なければならぬ。こんなに疲れた足で、はたしてどうなることかと、先が思いやられて心もなくなってしまう。

しばらく考えていた甚吉は一計を案じ、そうだ、この辺の水を汲んで帰り、伊保坂の水だと言えば、重病人の七兵衛さんにわかるは

いたリンジャーさんが、なおしてやるからこちにやれと言ってそのケンを受け取り、自分の歯で難無く真直になおして子供に渡した。

これを見た和尚が、お前さんはずいぶん歯が強いのだ、と声をかけると、こんなものお茶でもござらぬ、二銭銅貨でも噛み切れますよ。と言って、大きな二銭銅貨を噛み切って見せたという。

また、その頃、三瀬村の宿に三島屋という酒屋（正島酒屋）があったが、ある日、リンジャーさんが一杯飲もうと思ってそこに立ち寄った。酒屋の主人は、リンジャーさんが歯の強い人だと聞いていたので試めして見ようと思い、店先においてある青茶出（青色のどびん）を指差して、その青茶出を噛んで食べた酒一升あげると、半ば冗談に賭け話をもちかけた。まさかと思っただ、リンジャーさんは早速承知して、その茶出を割り、ガリガリと噛みくだいて食べた。最後に蓋の取手の球のところがヒョロヒョロしてどうしても噛めないのだ、口から出してたたき割り、また口に入れてガリガリ噛んで食べてしまったという。勿論約束通り酒一升はもらったのである。

この話をしてくれた伝照寺の仙崖和尚は、これは実際にあった話だと付け加えた。

第二節 昔 話

一 猿と蟹の争い（その一）

むかしむかし、猿と蟹が出合したて、そうして、猿が蟹どんにいわすことにや、「蟹どん、蟹どん、おとなな米の穂は拾うて来やい。おりや、上さい行たて、小豆ば拾うて来っけん。そいで、欠しぶりい、ばた餅つくつて食おうぢやっかん」と相談しやつたて。蟹どんも「そりやあ、よか思いつきばん」というて、話がまとまり、米と小豆ば拾うて来やつたて。それを炊いて大きな餅ば作つて。できあがつた末にや、その猿どんが、全部袋の中に詰めこんでしもつて、木の上にゴソゴソゴソとひゃあがつたて。蟹どんな木に登れんで、くやしゅうてたまらんもんじや、「猿どん、猿どん、そのばた餅、俺えもいっちょくれんかん」というたぎ、猿どん「いやばん」という。「そういわんでもくれんかん」、「いやばん」と言い争うているうちい、猿どんな、木の上にあんまい高こうあがすぎて、とうとう、木の枝が折れて、下にどすーんと、落つちやえらしたて。そいぎと、蟹どんが、そこに行たて、猿どんの尻つべたば、はさみ足でジリツとねずんだて。猿どんな、痛うしてたまらんもんじや、「毛くるっけんかんにんしやい、毛くるっけんかんに

んしやい」て言わしたて。そいで、今の今まで、猿どんのお尻は赤うはげて、蟹どんのはさみ足には毛があつてつたん。そいばつきや。

二 猿と蟹の争い（その二）

むかしな。あのう、猿と蟹がおつたつてつじやん。その、猿は柿の種ば持つとつて、蟹は握ん飯ば持つとつたて。そうして、柿ん種と握ん飯ば取換えたちゅう。そいから、蟹は家さい帰つて、柿ん種ば庭に蒔あて、水かけたたい、こやしかけたたいして、一生懸命ふとらせたてつたん。そうしたいば、桃栗三年柿八年ちゅうて、八年たつたぎ、柿の実のなつたてつじやん。その実の熟柿いなつたぎと、猿が来ていうことにや「おいが、その柿、ちぎつてくりゆうだん」て。そいで、蟹は猿に頼んだて。そいぎ、猿は柿の木いのぼつて、熟んだとから取つて、いち食うて、蟹には、いっちょでん、くれんてじやんのう。そいで、蟹が腹きやあて「猿どん、猿どん。おれえも、いっちょなつと、くれんかい」。て言いやつたて。そいぎと、猿どんな、青んば柿ばちぎつて、蟹になげたてつたん。そいが蟹のごちやあに、コツンてあたつたもんじや。蟹どんな怪我して、泣きよらしたて。

そこんこれえ、白どんと、栗どんと、熊ん蜂どんが通いかかつ

て、「蟹どん、蟹どん。なし泣きよっかい」て聞かしたて。蟹どんが泣きながら、わけば話しやつたぎと、白どんが「よしよし、おどんが、仇ばとつてやつたん、のう栗どん蜂どん」て言いやつたぎと、栗どんも蜂どんも「そぎやんしゅうだん」ちゅうて、話し合わしたてつたん。

そいから、ある日。猿の家え、白と栗と蜂どんたちが、仇打ちい行きやつたてつたん。そうして、白どんな戸口の天井に上がつて、栗どんな囲炉裏の中やあ埋まつて、蜂どんな井戸端やおらしたて。そこんこれえ、猿どんの帰つて来らしたて。そうして、「寒か、寒か」ちゅうて、囲炉裏端さい行たて火ばあせえやつたて。そうしたぎい、栗どんの「パチーン」ていうて、猿どんの股ぐりやあ、とびかからしたてつたん。そいぎ、猿どん「アツツツ、アツツツ」ちゅうて、井戸端さい冷やしやあ行きやつたて。そうしたぎ、蜂どんの飛うできて、チクツ！と股ぐらば刺しやつたて。そいぎ、猿どん「あいたたッ」ちゅうて、家ん中さい入ろうでさしたて。そうしたりや、こんだ、白どんが戸口の上からドスンと落ちてきて、猿どんば、おしやあつけやつたて。そうして「猿どん、猿どん。こにやーだは（この間は）蟹どんに怪我させて泣きやあたけん、その仇打ちたい。降参すつかッ」て言わしたて。そいぎ猿どん「ああ、苦しか、苦しか。今からもうせんけん、勘忍してくいやい」ちゅうて、ことわけいわしたて。そけえ蟹どんが出て来て、猿の尻つべたば、ジリツ！てねずうで、「そんないば、かんにんしてやろうぢや」て言

わしたて。そいけん、猿の尻つべたは、今でん、まあつきやしとつてつたい。

そいまで。

三 かちかち山

むかし、お爺さんが田ん中打ちおいやつたて。そいぎ、猿が出て来て「左ぎにやあペツタンシヨ。右ぎにやあヨロヨロ」ちゅうて、猿がわやくいうもんじや。そいで、「こん畜生！」ていうて、爺さんの腹きやあて追わす。猿は逃ぐるばつてん、また、ぢきい来て「爺さんの左ぎにやあペツタンシヨ。右ぎにやあヨロヨロ」て言うもんじや。

今度あその、家へあがつてから、「婆、婆、俺え、猿取いきやあもちば作つてくれんか」。「猿取いきやあもちば、何いすつかん」。

「俺が田打ちよつぎ、猿が出てきて、左ぎにやあペツタンシヨ。右ぎにやあヨロヨロ、ちゅうて、石い座つて、わやくばしはたす。そいけん、猿取いきやあもちば持つて行たて、石の上え、ぬすくい付けて、猿ば取らんばならん」て言いやつた。

そいから、その爺さんな、婆さんの作つてくいやつた猿取いきやあもちば持つて行たて、石の上えぬすくい付けてから、田ば打ちよらすぎと、猿はそぎやんこたあ知らあじ、また出て来て、石の上え

座って「爺が左ぎにやあペツタンシヨ、右ぎにやあヨロヨロ」て、わやく言うもんじや。「こん畜生！」て追わしたところが、今度あ、逃げられんもんじやいけん。爺さんは猿ばひつつかまえてきて、わが家の大黒柱あ縊いつけておきやうた。そうして、昼飯どん食うて「婆さん、婆さん。この猿ば解くぎでけんばん。あのう、今夜は猿の汁ば焚あて吸うけん」ていうて、爺さんのまた田ん中さい行きやうた。

そのあと、婆さんの米なでして、石臼でコツツン、コツツン搗きよいやんもんじや。猿がそいば見て「婆さん、婆さん。俺が米ばなでてるけん、ほてえてくれんかん」て言うたて。婆さんな「いやばん。爺さんの、くりいなとこれえ。おりやあ、ほときやあせん」て言いやうた、猿が「婆さんもきつかろう。おいが米ば搗いてくるけん。そぎやん言わあじ、ほてえてくいやい」て、あんまい言うもんじやあ。わがもきつかうたけん、ほてえてくいやうたてつじやん。そいぎと、猿がよろこいで「俺が、米ば搗くけん、こぼれよつとば、おとん拾いやい」て言うて、コツツン、コツツンて、搗きだしたて。そうして、わんざと米のこぼるつと搗いて、婆さんの拾いやうとき、一杵搗いては「婆が頭はコツツンシヨ」ちゆて、杵でくらわすもんじやあ、とうとう、婆さんな叩き殺されてしもうた。

夕るしいなつて、爺さんの暇なしして、あがつて来らしたて。夕飯食うとき、「爺さん、爺さん。猿の汁はうまかのう」。「うーん、

うまか」ちゆて、爺さんな、婆さん汁ちゅうこたあ知らあじ、食うてしまわしたて。そうしたりや。婆さんに化けとった猿が、外さい出て「上の棚ば、ようつと見やい。下の棚のも、ゆうつと見やい」て言うもんじや。こりやあ、婆が、妙なことは言いはたすにやあ、て思うて、棚ば見てみらしたところが、婆さんの頭てん、首てえろん手てん、足てえろん。じゅうつてしもうて、肉離ぎやあて、いっちらとったもんじやいけん。

爺さんな、びつくいして、猿からだまされたと、氣付いたばつてん。知らんふいして、ようし、見とれ、仇ばとつけん。今度あどぎやんして、猿ばうち殺すかと考えらしたて。

そうして、「婆さん、婆さん。おとんも中あ入って、ゆつくいしやい」ちゆて、化けた婆さんば家の中や入れて、外からまわりば、ぐるつとつめて、その家ば爺さんの燃やさすて。爺さんの火打石で火ばつけらすとき、音のすんもうじや。「チツカン、チツカンいうた何かん」。「いつものチツカン、チツカンたん」。「カツツン、カツツンいうた何かん」。「いつものカツツン、カツツンたん」。「ボウ、ボウいうた何かん」。「いつものボウ、ボウたん」。て、中からと、外からと、言いかわしよいうたて。

そのうちい、家のまわいから火の出てきたもんじや。婆さんに化けた家ん中の猿は、うったまげて「爺さん。もう助けてくいやい。はよう助けてくいやい」て言うばつてん。「婆は殺れえたけん、かたき打ちたあ。わがあ死ね死ね」ちゆて、焼き殺れえしもうた

てつたい。

そいばつきや。

四 猿 聾 入

むかしな。田ん中や水ば掛きゆですつばつてん、いっちゃん、かからんじやうたて。そいで、おやじさんが、くやんで「だいじやい、水ば掛けつくるんないば、三人持った娘のうちい、どいなつと一人、くるつばつてん」て、独い言ば言いよらしたて。そいぎ、猿どんがそいば聞いとつたて。そいで、「おやじどん、おやじどん。今ん話しやほんなことかん」て言うたところが、「阿呆らしか。おいが、すらごとば言うもんか」。「ほんなことえ、くるんない」。「ええ、やかまし。男の一遍言うてから、そぎやんすらごとば、いもんか」。こう言うたて。そいぎと、猿どんが「俺が、この田んなきやあ、水のかかつごと、してやろか」て言うたてたん。おやじさんな、人間しやあが掛け得んとけえ、猿が水ば掛けゆんもんか、て思わしたもんじや、「そんないばいっちゃん、掛かつごととしてくいやい」て言わしたてえ。

それから、あくる日、また、田んなきやあ水ばかけや行たてみやつたぎと、水一杯、掛かつとつたてえ。そけえ、猿が出て来て、「おやじさん。水ば掛けてくいたけん、娘ば嫁ごにくだい」て言

うもんじや。おやじさんな、困ったこてえなつたて思わしたばつて、約束じやつけんしかたなかもんじや。「よかたん。待つといやい」て、こまあか声で言わしたて。

人間同志ないばよかばつてん、猿の嫁ごじや娘がむぞうげじやもんじや。どぎやんしたこんなよかうかにやて思うて、娘に話すこともでけえじ、その日から病人のごとなつて、寝付いてしみやあやうたて。そいぎ、総領娘が世話して、「お父ちゃん。どぎやんあつかんた」て聞いたて。おやじさんな、どうせ一ぺんな言わんなんて思うて「どぎやんもなかつて、やさんたちい、頼みがあつた」て言わしたぎと、「なんじやい頼いて、言うてみんことにや、わからんたんた」て娘が言うもんじや。おやじさんな、俺が、独い言いうたがもとで、猿と約束してしもうたことは、因果含めて話してから「こりやもう、仕方なか、約束じやつけん聞きれてくいやい」。て頼ましたて。

そいぎ、総領娘は「いくらなんでも、猿の嫁げえはないとなか」て言うもんじや。「俺がやいそこにやあばつてえ、親孝行すつて思いうて聞いてくいやい」て頼みよいうたぎと、二番目娘の出で来て、その話ば聞いて、「お父ちゃん。心配すつこたなか。そのかわり、簞笥てん、長持てんないらんけん、太か、はんず裏と強か縄ひもば買うてくんしやい」て。こう言うてくれた。

そいで、おやじさんの病氣もゆうなつて、猿どんに、二番ちよう娘ばくるつと決まつたて、知らせらしたて。

待ち焦がれて暮りやあつた猿どんな、大喜びで、じきい迎えや
あ来やつたてつたん。

猿どんな、嬉しゅうしてたまらんもんじや「荷物は俺がかかるうて
行くたん」て言うて、太かはんず襲ば、縄ひもでわが五体にしつか
いと結いつけて、チヨコチヨコ歩うで、娘ばわが家さい連れて行き
やつてつじやん。

山越え、谷越え、行きよいやつたぎ、深か川んとこれえ来たて。
娘は、ここじやつて思うて、小石ば川んなきやポチャンと落てえて
から、「宝物の簪は、川に落てえた。」ちゅて泣きやつてつじやん。
そいぎと、猿どんなが「なあに、心配すんな、心配すんな。おいが取
つてやつ」て言うて、襲ばかるうとつた忘れて、川に跳びこんだつ
て。そいぎ、襲に水の一杯ひやあたもんじや、何べんでん上がろう
でさすばつて、ブルツ・ブルツて沈うでしもうて、とうとう溺れ死
んだつて。そいで、娘は無事にわが家さい帰つて来たてつた。

そいばつきや。

五 蛇 罾 入 (その一)

むかしむかし、分限者のお嬢さんのとけえ、毎晩のごと、立派か
男の通うてくつてじやん。その男も金持ちじやつたて。そいで、親
も娘ばくいてもよかて思うて、おお目に見とつたてつたん。ところ

そいばつきや。

六 蛇 罾 入 (その二)

娘さんがおんさつたて。そいで、毎晩、良か男の遊びや来つて
つじやん。その男は蛇の人間に化けたとじやつたて。

娘さんな、そぎやんこたあ知らあじ、その男と結婚しんさつたつ
て。そして、お腹に子どものでけたつて。そいでん毎晩来んさんも
んじやつけん。また来んさつたとき「私や、こぎやんさつとつ。ど
ぎやんしたらよかうか」。つて、その娘さんが言いんさつたて。「
そぎやんなつとんないば、五月五日の節句に、くちなわいちごば食
べろ」つて、その男の人が言いんさつたて。そいで、五月五日に
そのくちなわいちごば、娘さんの食べらしたば、子供の流れたつて。
そのいわれで、五月節句には、いちご酒ちゅうて、むかしは飲んだ
つていう話。

そいまで。

七 姥 捨 山

むかしや、姥捨山ちゅうてあつたて。米の足らんもんじや。年寄
の人のおらすぎ食わせられんけえ姥捨山に捨てんばなんごと、村で
決まつとつたてつたん。そいけんが、誰でん、年寄のおるぎ、どう

が、その男の来つとば、親が気づけとらしたぎと。おかしなことに
や、障子も開かんとけえ、その男はちやあんと娘の部屋さい入つて
来とつてつじやん。

そいもんじや。親が娘に言わすことにや「お前のとけえ通うて来
らす男は、障子ば開けえじ、中さい入つて来らすごたつて、ま
さか、魔物じやなからうない。今夜来らしたときや、こつそらあと、
男の着物の裾とけえ、木綿針に糸ば長つつけて、刺しとて見やい。」
て言うて、長がカダルマ糸の付いた木綿針ば娘に持たせときやつた
て。

そうしたぎ、その晩も男の来たもんじや、娘は親から言われたと
おりい、その男の着物の裾に木綿針ば刺しときやつたて。

翌朝、男の帰つたあと、糸ばたどつてみらしたぎと、障子の破れ
目から出て、裏山のほら穴さい入つとつたてえ。そうして、穴の中
で鉄針で刺された太か蛇の呻きよつてつじやん。その呻き声ばジ
ツと聞きよらしたぎ、「あの娘さんも、もう俺が魔は宿しとつけん、
世間も相手にすんみやあ。桃の花の酒ば飲むぎと、子はおりつぱつ
てえ」。て言いよつたて。そいで、その娘さんが、桃ん花の酒ば飲
みやつたぎと、蛇の子はおりたてつたん。そいけん。女は魔物の子
ば産まんごと、むかしから、桃の節句の白酒ば飲むごととなつて
つたん。

でんこうでん、姥捨山さい連れて行かんない、どぎやんしゅうでん
なかつた。

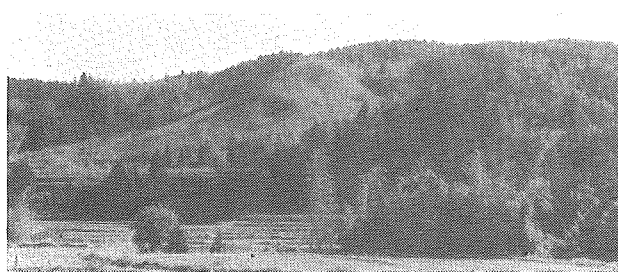
その村に、年寄のお母しゃんは持つた孝行息子のおつて、「俺だけ
は、どうしてでん、捨つつ気になれんばつて、村の決まいじやつけ
ん、しかたなか。お母さん、かんにんしてくいやい」。て言うたて。

そいぎ、母親は「もう、おりやあ、どうでんかんまん。行くとはよ
かばつてん、あぎやん遠か山さい、あさんが送つて来てくりゆうで
が、危なかつたん」。て言うて、息子に負んぶされて家ば出らしたて。
そうして、ずーつと行きよつたぎとにや、年とつたお母さんな、道
々、柴の枝ばポキツ、ポギツて折つて行きやつたて。山に着いてか
ら、息子が「こいで、どうでん別れんなんばい。かんにんしてくい
やい。おりやあ、こいで帰つけん」。て言うたぎない。「道々、ずう
つと柴の枝ば折つてええた。おいが戻つたいしゅうでじやなか。あ
さんが帰つとき迷わんごとおし折つとつけん。ずうつとそこば通つ
て行きやい。そいぎ道や迷わん」。て、お母さんが言わしたてつた
ん。そいぎ息子は、わが身のこたあ忘れて、子のことば心配さすお
母さんば、そのまま捨てて帰る気にな、どぎやんしてもなれんもん
じや。「村の掟てにそむいて済まんばつてえ、家さい帰ろい」。ちゅ
うて、またかるうて（負ふつて）、家さい戻りやつたて。そうして、床
の下に穴ば掘つて、そこばりつぱい（立派に）して、かくれさせて、
飯てん何てん食わせよらしたてつたん。

そぎやんしよつたばい、ある日、殿さんから、「灰で縄をなつて

献上すれば褒美をとらせる」。ちゆて、お触れの出たて。

百姓たちやあ、誰でん、灰ばこねて、縄ば作ろうでしたばってん。どぎやんしても縄にならんと。それで、その、八十幾つのお母しゃんが「そぎやんことじゃ、縄はできん。そいけん、はじめ縄ばしつかいのうて、そして、そいば、じいっと焼くぎと、灰の縄のでくつ」。て、息子に教えらしたて。そいば息子そぎやんしやつぎ、灰の縄のきれえにできたて。そいば庄屋さんに持つてたて、殿さんに献上しやつたぎと、殿さんはそいば見て「これは珍らしい。誰が献上したか。早速召し出せ」。て言わしたて。そいもんじゃ、息子は呼び



井手野部落向うの姥捨山、麓に経塚がある

出されて「こりやあ、お前、よくぞ灰の縄ができたのう。褒美をとらせるぞ。何でも欲しいものを言え」。て言うて、殿さんから誉められたつて。

そいぎと、その息子が「いいえ。こりやあ、私じゃございまっせん。実は、姥捨山に捨てんならん八十婆ちゃんが、おるばつて、山には捨て得じ、法ば破つて、匿もうとつたりや、その婆ちゃんが教えらしたけん、あの縄ば作つことんできた。私はどうしても母親ば捨つつこたあできん。わが身はどうなつてもよか、年寄りば捨てえじよかごと

していただきたか」。て答えらしたぎと、「ああ、そうであつたか。以後、姥捨山は止めることにするぞ」。て、殿さんから許しの出たて。そいからその姥捨山は禁止になつたてつたん。いまでも井手野にその山と経塚のあつたん。

そこまで。

八 蛙の親不孝

むかしのう。ビッキーがおつて、親が「山さい行け」つて言うぎ、川さい行く。「川さい行け」つて言うぎ、山さい行く。何でも親の言うてえ反対ばつかいすつてつじやん。

そいで、親ビッキーが死ぬまぎわになつて思わすことにや、俺が死んだときや、山に埋けて貰りやあたかばつて、この子は反対のことはつかいすつけん、山に埋けろて言うぎと、川に埋くんにちぎやあななて。そいけん思うことと反対に「俺が死ぬぎと、川端に埋けてくいやい」。て言うて死なしたつて。

そうしたぎと、子ビッキーは、俺や、親の生きとらしたときや、反対ばつかいしよつたけえ、せめて死なしたときなつと、親ん言うことばきかんばて思うて、親蛙の言うた通りい、川端に埋けらしたつた。

そいで、雨の降るたんびに、親のきやあ流りやあすんみやあかて

思うて、世話でたまらんもんじゃ、今でも雨の降つぎい「ギャッ・ギャッ・ギャッ」つて鳴きやつてつた。お前たちも、親んいうこと聞かんぎと、ビッキーのごと、ごつとい泣かんばならんばい。

そいまで。

九 蛙の道中

むかしから、井の中の蛙ていう言葉のあるばつて、肥前のビッキーも筑前のビッキーも、めっちゃあその、世間には出たこたあなかつたて。そいもんじゃ、久しぶいで今日は天気のかもんじゃ。筑前のビッキーが、俺あ、今日は肥前さい、肥前見物に行こうて思うて、筑前の方から三瀬峠さい、ばちばち登つて来よつた。そして、肥前のビッキーも、久しぶりもんじゃ、今日は筑前見物に行くかと、思え立つて、肥前の方から三瀬峠さい下から登つて来よつた。そいぎと、ちようどその、ふのゆう三瀬峠の絶頂で、両方から出合つたつたん。

そいぎと、筑前のビッキーがいうことにやあ、「よいい。肥前どん。あさんどこさい行きよつかい」。て。「おりやあ、今日は日のよかけんが、いっちょよう、筑前見物ば思え立つたたい」て言うて、お互いにあいさつして、「もう、ここは三瀬峠の絶頂じゃつけんが、もう、肥前も筑前もじきたい。もう一足たい」。ていうて、おたがい

に立ちあがつて「まあ、こつからちよつと眺めて見ゆうだん」ていうて眺めらしたと。そうしたぎ、ビッキーの目ん玉は頭のうしろについとるもんじゃ、わあが来た方を見ゆつと。そいで、筑前のビッキーの言うことにやあ、「肥前も筑前も同じことやつかい」。そして、肥前のビッキーも「ほんに。あさんの言うごつたい。ほんなごてえ。筑前も肥前と同じこつたい」。「そんないば、もう、こいから先さい行こうよいいたあ、別れて戻つた方がましはい」。ていうて両方とも戻つたてつた。

そいばつきや。

一〇 和尚と小僧

お寺の和尚さんの、ほんに甘酒好きじゃつたて。そいで、甘酒は大釜一杯作つとらしたぎと、小僧に飲ますつたあ惜しかもんじゃ、いつのはじゃあなつとん、小僧の知らんごと、飲んでくりゆうと思つて、すきばうがごうとつたて。

そうしたぎ、ある日のこと、和尚さんが「やい、小僧。今日はない。門徒のどこから供養の使あつたばい。そいけん、お経あげぎやあ、あさんの、ちよつと行たてこんかい」て言うて、使あに出して、小僧のおらんうち、大井ば持つてきて、甘酒は一杯盛つて、何処か、かごんで飲むと思つて、思案のあげく、「雪隠ないば、減多に誰

でん来んばい」てひといごというて、和尚が雪隠にかごうで、甘酒ば飲みよったちゅう。

小僧が戻って来たぎと、和尚さんの居っちゃんかもんじや。和尚さんの甘酒作つとらすとば、こないだ見たけん、大抵えもう甘酒えなつとらう。幸いのこと。和尚がいま居らんけん。今のうち飲んでくりゅうと思つて、小僧もまた、大井持つてきて、甘酒は一杯ちいで、「雪隠ないば、和尚も滅多来んばい」と思つて、雪隠のところへ行たて、戸ば開けたて。そうしたぎ。和尚さんの大井かかえて、雪隠にかごうで、おいでじゃつたもんじや。もう絶対絶命で、どがんしゅうもなかつたけん。「和尚さん。甘酒のおかわり」ちゆて、大井ば差しだしたて。

世の中にや、「隠すより現わるるもんなか」て言うちやつけんが、そぎゃん隠いて飲んだい、すんもんじやなかくて。

そいばつきや。

一一 山姥と蕎麦の茎

むかし、この村に利口な兄と薄ノ口で馬鹿正直な弟がおつたてつたん。

ある日、両親が山さいでかけた留守に、ヤマンバ（山姥）がひよつこい家に入つてきて「父ちゃん母ちゃんは、おらんな。何かう

まかもんば食わせんかい」て言うたて。

利口な兄が

「何も食うもんはなか」て言うたぎと、

ヤマンバは

「そんなら、お前たちは食おうだい」て言うて、近よつてきて、つかまゆうでしたて。

兄弟はびつくりして、裏山さい、いちもくさんに逃げて、柿の木いよじ登つたて。

そいぎと、ヤマンバは柿の木の下まで追うてきてから、兄弟ばにらみあげて

「お前たちや、どぎゃんして柿の木に登つたかい」てどなつたて。

利口な兄は、柿の木のとっぺんから見おろしながら、

「おどまあ、足のうらに油ばぬつて登つたたん」て、すらご言うたて。

ヤマンバは「そうかい、そうかい」て言うて、兄弟の家をいたて、足に油ばべつたいぬつてきて、柿の木に登ろうてしたて。そいばつて、油つけとんもんじや足のツルツルすべつて登られんてつじやん。

そいば見よつた薄ノ口の弟が

「鉈で柿の木い傷ばつけて登らん」て、いらんことば言うたて。

そい聞いたヤマンバは、早速、鉈ばもつてきて、柿の木い傷ばつけながら、てつぺんめがけて登いはじめたて。

兄は、だんだん登いつめてくるヤマンバを見て、こりゃあ、大ご

てえなつたと心配して、目ばつぶいながら

「天道さん、お天道さん。かねの鎖はおろしてくんさい」て、口ん中で唱えて、お祈りしたて。

そいぎ、不思議なことにやあ、空の上から、ジャラ・ジャラ・ジャラッて大きな音のして、かねの鎖のおりてきたてつじやん。兄弟は、そのかねの鎖に飛び移つて、空の上さい登いはじめたて。

もう一息でつかまえるるつて思つて、ヨダレたらしとつたヤマンバは、空高う逃げていく兄弟を見て、くやしゅうしてたまらんもんじや、目ばむくいじやあて、

「おーい。お前たちやあ、どぎゃんしてその鎖に登つたきやあ」て、大声でどなつたて。

そいぎと、薄ノ口の弟が

「お天道さんに、鎖はおろしてくんさいて頼んだたい」て言うたて。

ヤマンバは

「何て言うて頼んだかい」て聞いたて。

そいぎ、弟はまた、

「お天道さん、お天道さん。鎖はおろしてくんさい。て言うて、兄ちゃんが頼んだたい」て、得意になつて教えてしもつたて。

ヤマンバは、弟の教えたとおりの「お天道さん、お天道さん。鎖はおろしてくんさい」て折つたて。

昔話



綱じやなし、わらの腐り綱のズルズルッて、おりてきたてつじやん。

ヤマンバは、しめたつて思つて、うろたえてその綱に飛び移つたて。そいぎ、そのとたんに、綱はブツンて切れてしもつて、ヤマンバは柿の木のとっぺんから、真つさかしいなつて地べたに落つちやえたて。そうして、そこにあつた大石で頭ばしたたか打つて、血ばふきぢやあて死んだて。

二人の兄弟は、そいで助かつたばつて。そこに生えとつた蕎麦の茎が、ヤマンバの血で真つ赤や染まつたて。

蕎麦の茎や、もともとは青かつたばつてん、そんなときからいまんごと赤うなつたてつたん。

そいばつきや。